誰しも心に差別の芽

表題は毎日新聞 9 月 2 日朝刊「相模原殺傷 わたしの視点」、日本 ALS 協会長の岡部宏生さん。岡部さんで思い起こすのが、ことし 5 月初旬に衆院厚生労働委員会に参考人として招かれながら、障害を理由に一転して出席を拒まれたことだ。

本紙のインタビューに対し、ヘルパーが持つ文字盤に視線を送って言葉を選ぶ日本ALS協会の岡部宏生副会長＝東京都江東区で（中西祥子撮影）

写真は東京新聞 5 月 23 日朝刊(Web)から。岡部さんは本紙のインタビューに応じ、「障害者の意見を広く聞く国会、ひいては社会になってほしい」と訴えた。我那覇圭記者は〈取材を終えて〉で次のように書いている。

岡部さんは十年ほど前に ALS を発症し、現在はベッドで寝たままの状態。会話する際には、五十音が書かれた文字盤の文字を目の動きで示し、ヘルパーが一文字ずつメモして文章に仕上げる。岡部さんが口の形で母音を指定し、「あ段」ならヘルパーが「あ、か、さ、た、な」と順に読み上げ、岡部さんが目を閉じて文字を選ぶ方法もある。

表題の岡部さんの寄稿を紹介しておきたい。

相模原で起きた悲惨な事件は、多くの方に衝撃と同時に考え方に影響を与えたのではないだろうか。私は障害者というものは、社会の一員であって、社会の多様性の一つだと考える。自分が ALS(筋萎縮性側索硬化症)を患い身体的に最重度の障害者になったことは、誰のせいでもなく、自然現象の一つだと思っている。それでも自分の病気と障害者であることを受け入れるのは、なかなか困難なことだ。

多様性を受容してくれる社会になってほしいと願っているが、その土台になるものは何かと常々考える。この事件が多くの方に衝撃だけを与え、自分の世界とは別の出来事と捉えられることがないよう願ってやまない。社会は多様だが、一個人の中にも多面性が存在する。多重人格といった極端な話ではない。人はその時々によって考えが変化するし、環境で感情も変わる。そういう変化がさまざまに表出する。

今回の事件の容疑者は障害者の生存さえ認めない極端な考えに支配されているが、誰しも自分と異質なものに対する偏見や差別の芽を持っているのではないだろうか。そのことを深く自身に問いかけた時、この事件は初めて自分の世界の問題として考えられると思う。どうか皆様が自分の心の中にも存在する可能性がある問題として考えてくださるよう切にお願いする。そのことが社会から偏見や差別を少なくしていくことの土台になると信じている。

（2016 年 9 月 15 日）